# 思考力を育成する対話型の授業

福井大学
松友　一雄

## 一　対話による学習と思考力の育成

思考力を育成するためには、様々な他者との様々な対話が必要となる。他者との対話が学習経験として積み重ねられていくことで、学習者自身の中に他者が形成され、自己内対話が生成するからである。

学習場面における他者とは、基本的に「教師」と「他の学習者」であるが、本稿では前回触れた「教師」との対話は割愛し、「他の学習者」との対話が思考力を育成するための学習方法としてどのように有効であるのか、という点を述べていくことにする。*

## 二　「他の学習者」への意識の形成

他者との対話といっても、おしゃべりのような日常会話の積み重なりで思考力が育成されるというわけではなく、学習場面で教材を媒介としながら論理的な思考の交流が行われることを指している。

それでは国語の学習の中に話し合いの場面を設定する回数を増やせばよいかというと、なかなかそうはいかない。場面を設定したとしても、学習者がなかなか活発に話し合ってくれないことも多い。

この数年、そういった実情を打破するために何が必要かということを模索するものとして、福井県や石川県の小中学校の先生方と行ってきた取り組みがあるので紹介したい。

この取り組みでは、学習者同士が向き合って自分の考えを交流する姿が見られるようになるまでには一年から二年かかったが、時間がかかることは覚悟していただき、以下の点を一つずつ積み上げていった。

①他の学習者の発言や思考に注意を払えるように意識を形成する。
②教師は学習者相互のやりとりを生成させ、深めるための関わりを行う。
③論理的に自分の考えを表現するための力を育成する。
④話し合いが論理的に活性化するための課題を考究する。

①に関しては、体の向きや机の配置などの身体的側面からはじまり、とにかく主として教師に向けられている意識を他の学習者の発言や考えに向くように工夫を施した。まずは学習者の発言に他の学習者の名前が挙がるようになることを目指し、小学生には板書にネームプレートを張らせたりその授業で一番よかった発言を振り返らせたりした。中学生にはアドバイスカードを持たせ、級友の発言に対してアドバイスをする機会を設けた。また、こういった取り組みと並行して、教師は②と関連した表1のような関わりをもった。

すると、次第に学習者は他の学習者の発言に耳を傾けるようになり、そのうち質問や意見が学習者相互に向けられるようになった。

その結果、教師の発話量は以前に比べて減少し、学習者の発話量が増加した。教師も含めて学習者が「聞くこと」を強く意識した学習が展開できるようになったのである。

ちなみに③及び④に関しては、詳細は避けるが、学習者の発話が単語レベルで行われて

＊『ことばの学び』13号「思考力を育成する学習の構想」（P.6－7）

いるうちは論理的に交流することは不可能である。まずは、学習者の発話量を増やす必要があるということだけを指摘しておく。

**表1**

「今、●●君が言ったことをもう一回言ってみて」
（他の学習者の発言に耳を向けさせる）

←

「●●君の言ったことについてどう思う？」
「●●君の考えがもっとよくなるようにアドバイスしてあげて」
「●●君の考えと自分の考えはどう違う？」
（他の学習者の考えに向き合わせる）

←

「今、●●君はこう言ったけど、それに対して自分の考えを述べてみて」
「●●君の発言とどこが同じか、どこが違うかわかる人？」
（向き合って答えることを発問で要求する）

## 三　話し合いに参加する方法

前段で述べた取り組みは、現在では発話の量を増やす段階から発話の質を高める段階へと移行しているが、そこでは学習者の発話の質を高める方法として、その背後にある思考の質を高めることをねらった取り組みを進めている。それは、学習者がより多くの情報を持った状態で自分の考えを作り上げていく学習を組織することと、より多角的な思考の交流の場を作り出すことである。

なぜなら、「対話」を話し合いの形態として捉えると一対一のニュアンスが強いが、これを思考の交流の場として捉え、一対一での思考の交流から一対多もしくは多対多の交流の場へと高めていくことで、思考自体も多角的に広がりをもつことになるからである。

実は、比較的学習者自身の対話によって学習が展開するようになった学級でも、自分の考えはノートやプリントに書かれているが、話し合いになかなか参加できない学習者が相当数いる。そこで力点を後者に置き、より多くの学習者が話し合いに参加するための指導を行った。

そもそも、話し合いにおける学習者の意識は次の四つの点に向けられる必要がある。

1　自分の考え　　2　他者の考え
3　話し合いの流れ　　4　話し合いの内容

授業を観察していると、話し合いに上手に参加できない学習者は、1や2といった「対人意識」はあっても、3や4といった「話し合い自体」に対する意識が低いことが多い。

1～4はそれぞれに意識の向け方があり、それによって論理的に話し合いに参加することができるようになるので、その方法として、3と4とを意識した取り組みを行った。図1にその枠組み（フレーム）を掲げる。

**図1**

**●対人意識の形成（対象となる意見に対して自分の意見を出す場合）**
a. 質問（○○さんに質問ですが～）
b. 反対（○○さんに反対ですが～）
c. 補足（○○さんに付け足しですが～）
d. 解釈（○○さんはこういうことを言おうとしているのだと思います。）
e. 要求（○○さんに～ということを聞いてみたいのですが。）

＋

**●話し合いに対するメタ認知の形成（話し合いの流れや話し合われている内容に対して自分の意見を出す場合）**
a. 提案（今話し合われていることに対して～のように考えることもできます。）
b. 説明（今の考えを説明すると～のようになります。）
c. 整理（今の話し合いは結局、～の点で対立していると思います。）
d. まとめ（結局～ということです。）
e. 統合（二つの意見を合わせると～になると思う。）

こういった枠組みを学習者に定着させる方法としては、教師の発問の中に織り交ぜることも考えられるし、振り返りのプリントとして記述させる方法もある。また、学習者自身がこういった枠組みを用いて他者と関わること自体が、論理的な思考そのものであると考えることもできるだろう。

**まつとも　かずお**　福井大学准教授。現在、福井県周辺の小学校や中学校で「対話型学習」への取り組みを続ける。また、サイトを立ち上げて学校現場への多角的な情報支援に取り組んでいる。
（http://www.jie-labo.com/）